

国語科教員養成に関する一考察（二）

―「国語科教育法演習Ⅱ」を中心に―

渡辺 春美

はじめに

「国語科教育法演習Ⅱ」（四年次前期）は、「国語科教育法Ⅰ」（二年次後期）、「国語科教育法Ⅱ」（三年次前期）、「国語科教育法演習Ⅰ」（三年次後期）と設けられた国語科教育法の教育課程の最終段階に位置づけられている。これらの国語科教育法関連科目は、段階的履修が義務づけられ、三年次編入学生を除いて、逆順履修、同時履修は認められていない。それぞれの科目内容の中心は、「国語科教育法Ⅰ」が国語教育学の概論（注1）、「国語科教育法Ⅱ」が教材研究、「国語科教育法演習Ⅰ・Ⅱ」が模擬授業となっている。

「国語科教育法演習Ⅱ」は、国語科教育法の最終段階として、直接には次節に述べる目標の達成を期し、教育実習に必要な実践的な理論の習得と実践力の育成とを目指すものである。しかし、最終段階として「国語科教育法演習Ⅱ」は、そこに留まることなく、さらに、教職在職の全期間にわたって授業改善を行うための実践・研究力の基礎に培うものでなくてはならないであろう。

本稿では、「国語科教育法演習Ⅱ」の実際を、一五分講義、朗読、模擬授業に分けて報告し、考察を加えることにしたい。

一 「国語科教育法演習Ⅱ」の計画

「国語科教育法演習Ⅱ」は、次のような目標を掲げ、下記の計画に従って展開した。

1. 目標

①国語科教育の理論と実践、並びに関連理論の紹介・検討、②教材研究・指導案作成、③模擬授業を行うことをとおして、④国語力（ア. 読解力・イ. 表現力・ウ. 話表力・エ. 聞解力）、⑤国語科授業力（ア. 学習者把握力、イ. 教材把握力、ウ. 授業構想力、エ. 授業展開力、オ. 評価力）を養えるようにする。

2. 講義計画

（1）国語科教育の理論と実践

- ① 国語科教育研究の必要性
 - ② 国語科教育の内容と構造
 - ③ 教材研究と授業研究
 - ④ 話すこと・聞くことの学習指導の理論と実践
 - ⑤ 読むこと（文学教材・説明文教材）の学習指導の理論と実践
 - ⑥ 書くことの学習指導の理論と実践
 - ⑦ 言語事項の学習指導の理論と実践
 - ⑧ 国語教育の史的展開概論
 - ⑨ 国語教育の課題
- （2）模擬授業

3. 履修上の注意

二単位であるが、四単位分（一八〇分）の演習を行う。

4. テキスト

森田信義他著『新・国語化教育学の基礎』（溪水社）

5. 参考書

適宜紹介する。

6. 評価

取り組みの積極性、指導案、レポート、模擬授業、出欠を総合的に評価。

二 「国語科教育法演習Ⅱ」の実際

国語科教育法演習Ⅱは、二単位であるが、四単位分（一八〇分）行うことになっている。二時間の演習は、①一五分講義、②朗読・講評、③模擬授業1（五〇分）・協議及び講評、④休憩、⑤模擬授業2（五〇分）・協議及び講評と進めていった。なお、初回は、開講式を開き、受講者全員の一分間スピーチ、担当者挨拶、および「国語科教育法演習Ⅱ」の計画概要の説明を行った。また、三回目からは、模擬授業1・2の教材に関し、①教材観、②指導目標（価値目標・技能目標・態度目標）の立案、③模擬授業1・2の感想・批評をレポートとして、毎回提出させることにした。さらに、演習の一回を割いて、佐渡山美知子氏に朗読に関する講義と実演をお願いしている。講義の終了時には、「国語科教育法演習Ⅱ」に学びて」を提出させた。

(一) 一五分講義の実際

二〇〇三年度の「国語科教育法演習Ⅱ」における一五分講義は、次に掲げた資料を基に行った。講義は、指導計画の「国語科教育の理論と実践」に基づくものである。しかし、その実際は、順次行われる模擬授業で見いだされた課題に具体的に応えるようにしつつ、理論的にも深めたいと考えた。

- 1 足立悦男氏「詩教材で何を教えるべきか―異化の学力を求めて―」（『月刊国語教育』一九九六年一二月号 東京法令出版）
- 2 渡辺春美「古典入門期指導の試み―学ぶ意味にふれる授業を目指して―」（『国語教室』一九九〇年一月 大修館書店刊）
- 3 山城真弓氏「教材の発想を生かした発展学習の試み―『猫の動物学的宇宙誌』の場合―」（教育実習の実践報告）
- 4 渡辺春美「基礎・基本をおさえた学習指導の試み―『読むこと』・『書くこと』を中心に―」（日本国語教育学会編『月刊国語教育研究』二〇〇〇年一月）
- 5 小山清氏「チョーク一本の迫力―『いい板書』の基本―」（『月刊国語教育』二〇〇三・五別冊 厳選指導技法ハンドブック）二〇〇三年五月 東京法令出版刊）
- 6 森田信義氏「筆者の工夫の質を問う説明的文章の指導」（一九八六年三月 全国大学国語教育学会編『国語科教育』第34集）
- 7 「松崎英敏教諭授業 筆者を想定させて隠された部分を読み取らせる『ラスコー洞窟の壁画』
- 8 浜本純逸氏「国語科教育の課題」・岩間和子氏「情報を活用した説明的文章の指導」
- 9 大村はま氏「単元 いきいきと話す」（『大村はま国語教室2』一九九一年七月 筑摩書房刊）
- 10 数田彩乃氏「辻仁成『新聞少年の歌』の学習指導の試み」（教育実習実践報告）
- 11 渡辺春美「古典の学習指導」（倉沢栄吉氏・野地潤家氏監修 小田迪夫氏他編『朝倉国語教育講座』2 読むことへの教育）二〇〇五年一月 朝倉書店刊）
- 12 大槻和夫氏「国語科教育研究の課題」（全国大学国語教育学会編『新国語教育学研究』一九九三年一月学

芸図書刊)・渡辺春美「文学教材の授業活性化の試み―『ひと夏の読書』(マラマッド)の場合―」(『月刊国語教育研究』一九九〇年一〇月号 日本国語教育学会刊)

13 松本美樹氏「国語科教育模擬授業学習指導案(教材 私を束ねないで)」(全国私立大学教職課程研究連絡協議会主催「二〇〇〇年度教職課程運営に関する研究交流集会」における研究授業 二〇〇一年一月二七日)

一五分という短時間であるが、時間内に集中して講義を行うように務めた。模擬授業で見いだされる課題については、模擬授業後のおよそ一〇分の講評をもって指導を行う。一五分の講義では、そこで見いだされた課題に对应するように、実践論文によって具体的な授業方法を紹介し、実践理論を見いださせようとした。また、国語科教育の取り組みはならない研究課題についても言及するように努めた。しかし、一三回の講義資料を列挙してみると、模擬授業の課題に对应すること、系統的に実践方法を紹介し、実践理論を追求することとのバランスに今後の課題が見いだされる。今回(二〇〇四年度)は、「2. 講義計画」の①②⑦⑧について十分な言及ができなかった。短時間の講義ではあるが、「講義計画」をさらに精選し、実践と理論に関する理解を深め、探求心を育成するよう改善する必要がある。

次に二名の学生の授業に関する感想文「『国語科教育法演習Ⅱ』に学びて」から、講義に関する箇所を抜き出して掲げる。

(前略―渡辺) ミニ講義では、様々な国語教育の研究論文から、古典や説明文の授業を組み立てるポイントやどういった「力」が求められているのか、自分がつけさせたいと思っている国語力はどのような「ねらい」を立てれば達成できるのか等の具体例を知る事もできました。(後略―渡辺) (K・S)

(前略―渡辺) ミニ講義や模擬授業の講評では、様々なジャンルの具体的な技術を学ぶことが出来ました。小説では登場人物、時間、場所を押さえること、古典では、傍注資料の作成、音読のさせ方、立体的な読みなどです。全ジャンルに共通して言えることは、構造的な板書により教材に迫っていくことだと思います。これらの技術も生徒にどのような学力をつけさせたいのかを考えてからこそ生きていくものだとこのことを教わりました。

(後略―渡辺) (O・A)

学生は、毎回提出するレポート(模擬授業の教材に関する教材観、指導目標、模擬授業の感想・批評)、朗読とその講評、模擬授業とその協議・講評のそれぞれから、またそれらに関連させつつ学んでいく。それらに結び、短いながら、実践上の技術、また、その基盤ともなる理論を講義することが、学生の国語力、授業力を高めていくことに資するものと考えられる。

(二) 朗読の実際

朗読は、教室における範読として位置づけている。したがって、机間を巡りながら朗読することになっている。二年次における「国語科教育法Ⅰ」においても朗読とその講評を授業に取り入れている。「国語科教育法Ⅰ」における朗読が教科書教材によって行うのに対し、「国語科教育法演習Ⅱ」では、自ら朗読教材を発掘・開発し、理由を付して教材化して受講者に配布する。その上で朗読を行った。

次に学生の発掘・開発した朗読教材を掲げた。

- 1 G・N 湯本香樹実「夏の庭―The Friends―」
- 2 N・H 吉野弘「奈々子に」
- 3 Y・S 夏目漱石『吾輩は猫である』
- 4 H・S 吉本ばなな「お化けのポスト」(『TUGUMI つぐみ』より)
- 5 S・K 向田邦子「壊れたと壊したは違う」
- 6 I・A 宮沢賢治「やまなし」
- 7 Y・Y 遠藤周作「沈黙」
- 8 O・A 灰谷健次郎「太陽の子」
- 9 S・J 武部利男編訳 白居易「つばめの うた―リュウじいさんに―」(『白楽天詩集』より)
- 10 S・M 三田誠広『いちご同盟』
- 11 S・Y 芥川龍之介「蜜柑」
- 12 T・Y 夏目漱石『こころ』

- 13 N・Y 貫戸朋子 「マドゥーの地で」
- 14 T・N 長田 弘 「散歩」 (『深呼吸の必要』)
- 15 O・S 有島武郎 「小さき者へ」
- 16 T・K 原田宗典 『秘密』
- 17 S・Y 田村隆一 「木」
- 18 H・W 吉野 弘 「I was born」
- 19 S・A アンデルセン 「絵のない絵本」
- 20 S・N 作者不明 「手」 (『このころのチキンスープ—愛の軌跡の物語』より)
- 21 T・Y 渡辺啓子 「無医村の優しい人々」
- 22 N・K 大城立裕 「カクテル・パーティー」
- 23 A・A 山田詠美 「ひよこの眼」
- 24 M・W 高村光太郎 「その詩」
- 25 M・S 古謝 充 「転び方」 (『言葉にしたい感謝の気持ち』より)
- 26 Y・Y 荒巻 裕 「平和を築く—カンボジア難民の取材から」
- 27 T・H さくらももこ 「自転車の練習」
- 28 K・Y レオ・バスカーリア みらいなな訳 「葉っぱのフレディ——命の旅」
- 29 T・T 別役 実 「空中ブランコ乗りのキキ」
- 30 I・M 星野富弘 「かぎりなくやさしい花々—十字架の花—」
- 31 U・S 廣瀬裕子 「ひとつのことば」 (『HEART BOOK』より)
- 32 A・S 武者小路実篤 「一個の人間」
- 33 K・S 川端康成 『伊豆の踊子』
- 34 A・C 広中平祐 「生きること 学ぶこと」

- | | | |
|----|-----|-----------------------|
| 35 | S・A | 山ノ口 貌「雲の上」 |
| 36 | T・Y | 崎山多美「コトバの生まれる場所」 |
| 37 | H・S | 志賀直哉「菜の花と小娘」 |
| 38 | S・R | 宮沢賢治「よだかの星」 |
| 39 | K・S | 灰谷健次郎「友」 |
| 40 | H・N | 茨木のりこ「自分の感受性くらい」 |
| 41 | K・A | 黒柳徹子「トットちゃんとトットちゃんたち」 |
| 42 | N・G | 山ノ口 貌「会話」 |
| 43 | G・M | 宮沢賢治『風の又三郎』 |

上記の朗読教材の内、二つについて教材化した理由を付して紹介すると、次の通りである。

「太陽の子」灰谷健次郎

四十一

ふうちゃんのお父さんの病気が、沖縄の戦争に関係があるということが知れたとき、その衝撃はふうちゃんだけにとどまらなかった。

ゴロちゃんもろくさんも、しばらくは口がきけないというぐあいだった。

昭吉くんもギツチヨンチヨンもだまりこんでしまったし、あの陽気なギンちゃんまでが、こそこそと泡盛を飲んで、こそこそと帰って行くというあんばいなのであった。

沖縄の戦争は三十年前に終わっているのである。そのことが、てだのふあ・おきなわ亭の人々をやりきれない思いにさせた。

戦争は終わっているのだろうか。

なぜ、わたしたちの中だけ、戦争は永遠につづくのか。

てだのふあ・おきなわ亭は重苦しく、そして、どす黒く怒っていた。

いちばん、ものをいわなくなったのがキヨシ少年だった。東二見から帰ってからのキヨシ少年は、じっと考えこんでいる時間が多くなった。

ふうちゃんが話しかけても、上の空である。そのうち、一時間、二時間と店をぬけるようになった。

「作品を選んだ理由」

この本は、私が中学生の時に初めて涙を流しながら読んだ本です。この本は、神戸にある琉球料理屋「てだのふあ・おきなわ亭」が舞台です。ここでは、おとうさんの心の病気を機会に、ふうちゃんの眼を通して沖縄戦の悲劇と人間のやさしさが語られています。今回、朗読する部分の「戦争は終わっているのだろうか」という言葉は、私に重くのしかかり考えさせられました。

戦争を知らない時代に生まれ、平和であることに慣れてしまっている生徒や私たちは、常にこのような本を読んで、平和の尊さを考えなければいけないと思います。主人公が、生徒と同じくらいの年齢であり、会話形式で物語が展開していくので長編ではありませんが、とても読みやすい本です。ぜひ、読んで何か感じとってもらいたくてこの作品を選びました。

(80・A)

「絵のない絵本」 アンデルセン

第二十八夜

空高く野の白鳥の群が飛んでいました。その中の一羽は翼の力がおとろえて、だんだん下へ沈んでいきました。その眼はしだいに遠ざかって行く空の旅行隊の後を追っていましたが、翼をひろくひろげて、ちょうどシャ

ボン玉が静かな空気の中を沈んで行くように、沈んで行きました。やがて水面に触れました。頭をそらして翼のあいだにつっこむと、おだやかな湖に浮かぶ白い蓮の花のように、静かに横たわっていました。

やがて嵐が吹いてきて、きらきら輝く水のおもてに波をたたせました。すると、水のおもては、まるでエーテルのようにきらめいて、大きな広い波となつてうねりました。そのとき、白鳥が頭を上げました。きらきら光る水が、青い火のように白鳥の胸や背を洗って飛び散りました。暁の光が赤い雲を照らしました。白鳥は元気を取り戻して立ち上がると、のぼりくる太陽のほうへ、空の旅行隊の飛び去った青みがかつた岸辺をめざして飛んで行きました。ただひとり胸に憧れをいだいて飛んでいきました。青い、ふくれあがる波を越えて、ひとりさびしく飛んでいきました。

「作品を選んだ理由」

この作品は、世界の隅々を照らす月が絵かきに物語るといふ形をとった絵よりも美しい絵画詩です。「わたしの話すことを絵におかきなさい」という月の台詞は、同時に読者達への語りかけとなり、巧みな情景描写は、子供たちの想像を膨らませるでしょう。情景を思いうかべさせる様な朗読を意識して読んでみたいと思ふこの作品を選びました。

(19 S・A)

「太陽の子」の教材化の理由について、O・Aは、まず「中学生の時に初めて涙を流しながら読んだ本」であり、文中の「戦争は終わっているのだろうか」という言葉は「私に重くのしかかり考えさせられ」た作品であると述べる。ついで、「平和の尊さ」を生徒に考えさせるとともに、「太陽の子」の読書へと導くことを考えて教材化したと説明している。自らの読書経験が生きた教材化といえよう。教材の範囲は長編「太陽の子」の一部であり、登場人物とその関係が必ずしも明確ではないが、考えさせる重みを感じさせ、関心を喚起する教材となっている。「絵のない絵本」について、S・Aは「美しい絵画詩」とし、「読者への語りかけ」による「巧みな情景描写」は、「子供たちの想像を膨らませる」と、教材化の理由を述べている。ここには、S・Aの言語感覚が息づいてもいる。

朗読教材の発掘・教材化は、授業力（広義）の一つである、広く教材を求め、教材の価値を見いだす教材開発力・教材把握力の育成にも繋がっている。

朗読の講評では、ア. 発音・発声、イ. 声の大きさ・声の通り・勢い、ウ. 音調、エ. 声の質、オ. 間、カ. 緩急・強弱、キ. 意味表現・プロミネンス、他に、始め（出だし）と終わりの読み方や句読点の読み方、読み間違いについても指摘している（注2）。さらには、ク. リズム・テンポにも言い及んでいる。学生は、このような講評に学びつつ、朗読、範読する力を高めるものと考ええる。

朗読指導の一環として、佐渡山美知子氏による講義と実演を行った。二人の学生は、次のように感想を書いている。

「朗読は聞き手が主役」私は、朗読は自己表現だと思っていたので、この言葉に驚きを覚えました。確かに、朗読は、話しのどこに感動し、それをどう伝えていくのかという表現であり、そこに聞き手の存在が不可欠であるというのも納得出来ます。その上、私達は「教育者」を目指しています。子ども達に一方的に考えを伝えるのではなく、生徒が自由に受け止め、考えられるような朗読を心がけなくてはいけません。今回の佐渡山さんのお話からは朗読という表現だけでなく、教育者としての姿勢を学ばせていただきました。

また、佐渡山さんの朗読からは、普段のトレーニングと経験で培った素敵な表現が伝わってきました。私も、聞き手と作る朗読を目指し、日々アンテナをめぐらせて生活してみようと思います。とても学びの多い講演でした。ありがとうございます。

(S・A)

朗読をする際に、気持ちを入れて読むという漠然としたものは以前から考えていましたが、気持ちを入れるとはどういうことなのかという具体的な言及に考えさせられるものがありました。情景をイメージしてと、何気なく言ってしまうですが、それは自分の中で場面・情景が完全に浮かび上がっていないければならない。その情景を見せてあげるつもりで声に出す。そうやって初めて朗読に命が生まれる。そしてそれらは、発音、強弱、スピードといった技術的なものと密接に結びついているということ。また、ともすると自分の読みを押し付け

るのが朗読だと思いがちですが（少し極端ですな：）、朗読の主役は聞き手にあるという話しが印象的でした。あくまでそこにある（自分に見えている）情景を伝えることが朗読であって、“私は〇〇だと思います”を伝えることじゃないと。自分にはまだまだ遠い道のりだと思いつつ……。

最後に、標準語の発音について。正しい発音が大切だとおっしゃっていましたが、その通りだと思いつつも、なまりを消すべきなのでしょうか？言葉の意味をろくに知らないで、音もでたらめに出しているのであれば、それは理解の妨げになると思います。そうではなく地方のなまりであれば、わざわざ直す必要も無いと思うのです。というのも、私は東京出身なので、沖縄の人の“間違った”発音はすぐに気付きますし、それを直させようとするのは簡単にできますが、当人がその“音”で生活してきたのであれば、それを否定することはできないと思うのです。堂々と、伸び伸びとなまっていて良いと思うのです。なぜなら、普通に生活する上で、それで十分だからです。

しかし、音を気にして声に出すということは大切だと思います。音の持つ雰囲気と意味は密接なつながりがあると思うからです。

目だけで読むのではなく、声に出すことの意義を考えさせられた講義でした。ありがとうございました。

(S・J)

二人の学生は、朗読の主役は聞き手であること、朗読に命を宿すということ、それを確かにする朗読の技術、絶えざるトレーニング、教育者に通じる姿勢等について学んでいる。後者のS・Jは、標準語の発音（アクセント）で朗読することへの疑問を呈し、疑問に自ら答えようと考えていることで朗読の在り方に対する考えを深めている。

(三) 模擬授業

模擬授業1・2は、司会を置き、①指導案に関する模擬授業者による説明（三分）、②模擬授業（五〇分）、③授業者反省（二分）、④研究協議（約一〇分）、⑤講評（約一〇分）と進めた。

1 模擬授業実施日程と教材

二〇〇四年度の模擬授業実施計画は、次の通りであった。

四月二〇日	1	Y・S	「河童と蛙(草野心平)」(教育出版)
	2	T・Y	「春に」(教育出版)
二七日	3	I・M	「話し言葉と書き言葉」(教育出版)
	4	S・M	「漢詩」(教育出版)
五月一日	5	H・S	「仮包帯所にて(峠三吉)」(三省堂)
	6	M・W	「竹取物語」(教育出版)
一八日	7	G・N	「古人の心―枕草子・徒然草」(教育出版)
	8	H・W	「無医村の優しい人々(渡辺恵子)」(教育出版)
二五日	9	T・Y	「敬語」(教育出版)
	10	A・C	「平家物語」(三省堂)
六月一日	11	H・N	「卵(長野まゆみ)」(教育出版)
	12	T・H	「矛盾」(三省堂)
八日	13	Y・Y	「ホタルの里づくり」(三省堂)
	14	C・K	「近代の俳句」(教育出版)
一五日	15	K・Y	「字のないはがき(向田邦子)」(光村図書)
	16	S・J	「夏の葬列(山川正夫)」(教育出版)
二二日	佐渡山美知子氏による講義と実演		
二九日	17	S・R	「風の旅(星野富弘)」
	18	T・Y	「一塁手の生還(赤瀬川勇人)」

七月 六日 19 K・S 「方言と共通語」(教育出版)

20 O・A 「古人の歌」(教育出版)

一三日 21 H・S 「焼け跡(妹尾河童)」(三省堂)

22 S・K 「活用のない付属語」(教育出版)

二〇日 (再模擬授業)

二七日 ビデオ視聴(松本美樹による模擬授業)

*一部、実施順番に変更があったが、ここでは省略する。

2 指導案と模擬授業の実際

指導案は、おおむね、①教材名、②単元名、③教材名、④想定校、⑤取り扱い時期、⑥クラスの状況、⑦単元目標、⑧教材目標、⑨指導目標、⑩目標達成の方法、⑪領域別指導目標、⑫教材の系統(教材が一学年から三学年までのような系統のもとに構成されているかをまとめる―渡辺注)、⑬教材の位置づけ、⑭教材観、⑮教材研究、⑯授業略案、⑰本時細案、⑱板書計画、⑲学習プリント、という項目によって構成されている。指導案に基づいて模擬授業が行われる。なお、模擬授業時には、授業者以外の学生は中学生役を演じることになる。

(1) 小説教材「卵」(長野まゆみ)の模擬授業

以下、抄出して、「卵」(長野まゆみ)の指導案と授業の実際を紹介し、併せて考察を加えることにする。

①教材 「卵」(長野まゆみ)

②対象(想定校)・時期 名護市立久志中学校二年・一学期六月

③クラスの状況

積極的発言をする生徒―男子二名・女子一名、時に思いつきだけで発言、恥ずかしがって発言しない生徒―男子二名・女子三名、発言を聞くだけの生徒―男子二名。読解力の高い生徒が二、三名、一人読みという困ってしまう生徒が多数だが、浅い読み取り、人物を絞った読み取りはでき、教師に質問したり、周りの生徒に尋ねたりもできる。一人

読み、書き込みができず、集中力のない生徒が二名いる。

④教材観

本教材は、学校で人工孵化をしているチャボの卵が孵る瞬間に対する一人の少年の思いや、紺野先生と少年（少年の祖父）との心の交流が全体の主題である。少年の卵の孵化に対する関心の高さとそれを満足させてやりたいという先生の思いやり、無線機ではあるが孵化の瞬間に立ち合えた少年の満足感など、読み終えた後にも快い余韻が残る主題である。

また一文一文が短く、文末には言い切りの形が多用されていて、簡潔な文体となっている。これらにより、春先の岬の情景や登場人物相互の心情通い合いを、淡々としかも深く印象的に表現されているため、生徒にとっては読みやすい作品であると考えられる。

本文前半部分の作品の地理的描写からは、作品の舞台や季節感を、言葉を手掛かりにイメージ豊かに想像することが出来る。生徒である少年と同じ立場の読者である生徒一人一人に、少年の卵に対する思いへの共感はもちろん、紺野先生と同様の、少年に対する共感も持たせたい。相互の気持ちを理解することで心の伝え合いを感じさせたい。

人と人が共に生きている現実とは裏腹に、人と関わることを極力避ける人間が多くなった現代の社会だからこそ、言葉で表現された登場人物の言動から人と人との心の交流を読みとり、人物の心情を読み取る感性に磨きをかけ、豊かな人間性を養ってほしい。

⑤指導目標

- ・ 価値目標―人物の心情を読みとる感性に磨きをかけ、豊かな人間性を養う。
- ・ 技能目標―展開される情景を想像し、登場人物の行動や心情について、時間の流れを追って整理する。
- ・ 態度目標―人物の行動で表現されている人と人との心の伝え合いに関心を持たせる。

⑥指導略案

指導略案は、三時間計画で、場面一・二（二時間）、場面三（二時間）、場面四・五（三時間）と構成されている。一時間目の指導略案は、次の通りである。

<p>卵</p> <p>〔場面一〕 時・・・春の初め 場所・・・海の近く 登場人物 先生 紺野先生 先生 紺野先生 と教師 生徒 少年 ・この地域の人間ではない ・小さな島に住んでいる</p> <p>長野まゆみ</p>	<p>授業展開（発問・指示）</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 挨拶。持ち物確認。 （ノートは使わない旨指示） 2 前時の学習確認。 3 【導入】 「卵」のイメージ発表。 4 題名読み。どんな物語か考え、発表させる。 5 【展開1】 学習プリント配布。 6 「場面一」範読。
---	---

⑦ 模擬授業の実際
授業記録によって整理すれば、次の通りである。

<p>1 時間目（本時）</p> <p>☆登場人物を見つけ、学校付近の情景を思いうかべよう。 ☆強風の予報が出された時の登場人物の気持ちをそれぞれ立場に立って考えよう。</p>	<p>学習目標</p> <p>・題名読み ・作品の登場人物・時・場所を捉える。 ・登場人物の言動をチエツクし、気持ちを考える （班活動）。 ・集団読み</p>	<p>学習活動</p> <p>・自由発想させ、発表の機会を多く持たせる。 ・挿絵を用いる。 ・生徒の意見を絡ませて、登場人物の心の交流を考えさせる。</p>
<p>支援・援助の留意点</p>		

<p>少年 紺野先生 少年の祖父</p>	<p>うかない顔をした 少年を下宿に止めても良いと提案 少年をさとした</p>	<p>・明日のことが心配 ・できれば島に帰りたくない ・明日の孵化が見られなかつたら・不安 ・どうしても少年に孵化を見せてあげたい ・少年がかわいそう ・人生の厳しさを知ること大切 ・紺野先生に迷惑をかけたくない</p>
------------------------------	---	--

〔場面二〕

④ ↓学校で人工孵化しているチャボの卵

無線から快晴だが強風であると予報が流れたとき

- ・波が荒い日は学校に来られない
(渡し船が出せないから)
- ・おじいちゃんは舟を操舵する人
- 少年の祖父
- 職員
- 生徒 架橋を使っている人
- 教師

<p>☆皆が少年と同じだったら、どうする？ (少年の孵化に対する思いに共感を持たせる。) ☆話しの続きを予想しよう。少年の次の日を予想する。次回への興味付けを行う。</p>	<p>18 17 16 (時間切れ終了) 紺野先生の行動と気持ちについてまとめる。 祖父の行動と気持ちについてまとめる。 (机間巡視で、進行度や読み取りの実際を確認する。)</p> <p>15 14 12 11 「場面二」範読。 「卵」は、何の、どのような卵か。 少年はなぜ天候を心配するか。 学習プリント(「無線から、快晴だが強風である」との予報が流れたとき)の「少年・紺野先生・少年の祖父の行動からそれぞれの気持ちを考えよう」として、「人物」・「人間の行動」・「人物の気持ち」に関する書き込み欄を設けたプリント)による学習。</p> <p>10 9 8 7 登場人物を挙げ、人物について分かることを発表させてまとめる。 「場面二」の時はいつか。 場所はどこか。</p>
--	--

模擬授業は、小説冒頭部の読みとして、場面設定をまず読み取らせている。場所、時間、人物を押さえ、ついで、チャボの卵の人工孵化が迫っている時期、強風のため島からの舟が出せず少年が登校できないことが予想される状況を読み押さえた。そのような状況下、少年と少年に関わる人々の思いを読み取らせる授業を展開した。時間切れとなり、点線部の☆印については取り組ませるには至らなかった。この模擬授業について、学生は、次の感想・批評を書いている。

表情も明るく、声も聞きやすいし、授業の雰囲気は良かったと思います。板書の字もとてもきれいでした。学習プリントもイラストを入れたり、場面の状況がわかりやすいようにと細かい工夫がしてあってすごいと思いました。ですがスペースの余裕があまりなくて字が小さ目になっていたのが少し残念でした。授業はとても丁寧で、わかりやすいのですが、どことなく授業が間延びしている印象を受けました。実際にはクラスの状況にもあるように、読解力の高い生徒もいると思うので、授業のスピードはもう少し速めても良かったかなと思いました。授業お疲れ様でした。

(K・S)

時・場所・登場人物と小説の展開に即した授業になっていたと思う。しかし、小説の舞台は「片方の岬の腹にある学校」なので、そこをしっかりとおさえた方が良いと感じた。また、時間が足りなかったが、場面1をもう少し、テンポ良く進め(情景・人物設定は教科書に線を引かせるなど)、場面2で登場人物の背景を含めた行動と気持ちを読みとらせ、プリントにまとめさせると良いと考える。

(S・A)

とても落ち着いていて、安心して授業に参加することができた。大きな段落を二場面に分けていたが、一場面では、作品の舞台である学校の付近が巧みに表現されているので、場所を押さえるときにそのとも触れてもいいかと思った。しかし、そこには、あまり聞きなれない語句が多いので、難解語句だと思われるのは、プリントにまとめて配布するなどの配慮がほしかった。最後にそれぞれ人物の気持ちを考えさせたあとに、そ

それぞれの立場に立たせてなぜそういう気持ちになったかなど突っ込んでいってもおもしろいと思う。(O・A)

学生は感想・批評において、ともに模擬授業の良い点を評価しながらも、課題を見いだし、その改善を提示している。本年度の「国語科教育法演習Ⅱ」では、二二名の学生が模擬授業を行っている。先に述べたとおり、授業者以外の学生は、その時間に行われる模擬授業で用いる教材について、教材観をまとめ、指導目標を考えて臨む。その上で、それぞれに理論を踏まえ、工夫して行われる模擬授業の実際から、多くを学び自らのものとするとともに、課題を見いだし、その改善を図る。そのような営みの蓄積によって、国語力を高め、授業実践力を育成することができると考える。

(2) 古典(古文)教材『枕草子』の模擬授業

次に、古典(古文)教材の模擬授業の事例を掲げることにする。

①教材

「古人の心 枕草子・徒然草」(「4 古典に親しむ」『中学国語 伝え合う言葉』教育出版)

②対象(想定校)・時期 読谷村立読谷中学校二年二組・一〇月中旬

③クラスの状態

二学期最大のイベントである体育祭も終わり、落ち着いた雰囲気である。暑さも和らぎ、過ごしやすい季節になって、脱力感も見受けられない。

国語の学力はやや低めではあるが、授業には積極的に反応をしめてくれる。古典に対して、面白い、興味があるというのではなく、まだ古典に対する抵抗感のある生徒がいるのが現場である。(「学習指導案」一頁)

④教材観

「教材観」の中で、「枕草子」については、次のように述べている。

本教材で扱う「春はあけぼの」「月のいと明きに」(枕草子)からは、清少納言が見て感じた季節感や心情を

読みとり、感じ取ることが出来る。作品を何度も繰り返し読み、古典を古典のまま読むことが望ましい。そのため、口語訳は原文を軸にしたものを準備し、自然に内容理解ができるようにさせたい。内容理解ができれば、生徒達も「確かにそうかもしれない」と共感することができ、自然にももの見方に広がりを持つてであろう。また、自らのもの見方と、他者とのもの見方の違いを知ること、更なる視野の広がり期待できる。そして、考え方にも深まりが出てくるであろう。

〔学習指導案〕三頁

⑤ 指導目標

指導目標は、次のように設定されている。

価値目標―作品を繰り返し読み、内容を理解させる。また、古人の心、古人の存在を知り、古いものからしか得られない感覚を体験させる。

技能目標―歴史的仮名遣いの読み方を、実際に口に出して読むことで覚え、文語のリズムに慣れさせる。

態度目標―古いもの（古典）に対する縁遠さを少しでも縮め、古典を読む際に興味を持つて読むことのできる（態度の―渡辺注）持ち主にさせる。

〔学習指導案〕一頁

⑥ 目標達成の方法

「段階を追って様々なパターンで音読をする。」として、ア. 教師の範読、イ. 追い読み1、ウ. 追い読み2（歴史的仮名遣い、読めない漢字をチェックさせふりがなを振らせる）、エ. 男女で読む部分を振り分けて読む、オ. クラスで読む部分を振り分けて読む、という方法を試みる。また、内容理解のために、原文を軸に、原文に沿って内容が理解できるような学習プリントを準備している。

〔学習指導案〕一五頁

空の、山に

明け方 だんだんと
 春はあけぼの。 やうやう 白くなりゆく山ぎは、すこし 明らくなって 紫だちたる
 が たなびいている
 雲のほそくたなびきたる。

〔学習指導案〕一三頁

⑦ 指導略案

授業は四時間設定で、①枕草子「春はあけぼの」「月のいと明きに」(一時間)、②「春はあけぼの」を参考に学習者の季節感の文章化(二時間)、③徒然草「堀池の僧正」(三時間)、④「ある人弓射ることを習ふに」(四時間)と構想されている。その内、『枕草子』を教材とした最初の二時間の指導略案は、次のとおりである。

2時間目	1時間目 (本時)	
<p>☆「枕草子」に挑戦！僕の、私の「春はく」を書こう！</p>	<p>☆古典のリズムを味わいながら「春はあけぼの」「月のいと明きに」を読もう！</p>	<p>学習目標</p>
<ul style="list-style-type: none"> ・「春はあけぼの」を参考にし、各自の季節感を文章化する。 ・発表する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・「春はあけぼの」「月のいと明きに」朗読練習。 ・清少納言は何を見ていたか？考える。 	<p>学習活動</p>
<ul style="list-style-type: none"> ・初めは名詞(何を見て)後に感じたことを書かせる。 ・時間の許す限り、できるだけ多くの生徒に発表させる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・清少納言のもの見方、感じ方を考えさせる。 ・文の切れ目、単語のつながりを意識し、古典を味わいながら範読する。 ・様々なパターンで朗読練習させる。 ・解説、古典を読むポイントを丁寧に行う。 	<p>支援・援助の留意点</p>

⑧ 模擬授業の実際
授業記録によって整理すれば、次の通りである。

板 書	授業展開（発問・指示）
<p>作品名 枕草子 作者名 清少納言 時代 平安時代</p> <p>「内容理解1」</p> <p>★作者は春夏秋冬のいつの、何を見ているのか？</p> <ul style="list-style-type: none"> ・春―明け方の空。 ・夏―夜。月の夜。蛍が飛んでいる様子を見ている。夜に雨が降るのを見ている。 ・秋―夕暮れの空。雁が飛ぶのを見ている。風の音、虫の音を聞いている。 冬―雪の降り積もった早朝。炭を持ち運ぶ人を見ている。灰しか残っていない火鉢を見ている。 	<p>【導入】</p> <ol style="list-style-type: none"> ① あいさつ・出欠確認 ② 日頃思ったことを日記などに書く人を挙手させる。自分の思ったことを自由に書くこと―「随筆」と説明。千年前の人が書いた随筆を読んでいくと授業を方向付ける。 ③ 教科書の単元の扉を読む。 ④ 学習プリント（傍訳付きテキスト）配布。 ⑤ 作品名・作者名・時代を尋ね板書する。 ⑥ 学習目標提示。 <p>【展開1】</p> <ol style="list-style-type: none"> ⑦ 範読―歴史的仮名遣の読みを書き込ませる。 ⑧ 一斉音読練習―読み方の注意、間をとるところなど注意して読みの練習をさせる。 ⑨ 春夏と秋冬に分け、男女で読ませ、男子の読みに対しては女子に、女子の読みに対しては男子に感想を言わせる。 ⑩ 授業者が、学習プリントの傍訳を繋いで口語訳を音読し、春夏秋冬のイメージ化を図る。 ⑪ クラスを二つに分け、春夏、秋冬をそれぞれ音読する。 ⑫ 好きな季節について、数名に音読させる。

「内容理解2」

★何を何に例えて素敵だと言っている？

・水しぶきを、水晶が割れているように、と例えている。

【展開2】

⑬ 「月のいと明きに」について、間を置く箇所を注意しながら範読する。

⑭ 一斉音読練習

⑮ 班ごとに文章の切れ目で切つて音読。

⑯ 「をかしけれ」に気持ちをこめて読むことを指示し、
範読して見せる。

(時間切れ終了)

音読中心の授業であった。「展開1」では、不十分ながら大村はまの「傍注資料」に学んだ傍訳付きの学習プリントを準備し、様々な形態の音読を行わせ、音読を通して理解に至らせようとした。文の切れ目、単語のつながりを意識させる範読、ゆつくりと後を追わせ、歴史的仮名遣い、読めない漢字をチェックさせ、読みに慣れさせる一斉迫い読み、春夏、秋冬に分けて分担させ、感想を交流する音読を行わせた。また、傍訳を繋げて口語訳を音読し、内容理解を行わせている。その上で、好きな季節の音読に向かわせた。しかし、「板書」欄に記した波線枠の「内容理解1」は、指導細案には記されていたが、扱わないままに授業が進められた。「展開2」も音読中心であった。ここでも指導細案に記されていた「内容理解2」には、入らないままに授業を終えている。

学生G・Nは、模擬授業後に、次のように反省している。

読ませることが中心の授業でも、作品の内容に触れないと想像が膨らまないという指摘が練習のときにもあった。繰り返し読めば、なんとなく意味が分かってくる、それでいいと思っていたが、模擬授業を通して、確かに①内容にも触れなければいけないと、そうしなければ想像も膨らまない、と感じた。②学習プリントを工夫したり、口語訳を教師側が読みあげたりするだけでは足りない部分があることに気づいた。内容をサラッとと言う技術を身に付けなければならぬと思った。そして、③もっと生徒と教材をからめてあげなければ楽しい古典の授業にはならないと感じた。刺戟ある授業の工夫をこれからの課題にしたい。

(「反省」G・N)

G・Nは、模擬授業によって、①②のように反省し、③のように考えるに至った。「楽しい古典の授業」のために、「もつと生徒と教材をからめ」る必要性を感じたところに実践的な認識の深まりが見いだされる。この実践的な技能の試み、実践を通じた認識の深まりと課題の発見に模擬授業をとおした学びの意義が見いだされる。

この授業に対する学生の感想・批評は、次の通りである。

音読を重視した授業で受けていてとても楽しかった。ただ音読を繰り返すのではなく、様々な読みの工夫を凝らして授業が活性化されていた。男女に分かれての音読の後に「お互いの音読を聞いてどうだった？」と生徒に読みの評価を投げかけたのも、評価される側はともに関心が高くなるし、自然と授業に集中していた。音読が声を出してリズムを味わうだけに留まらず、歴史的仮名遣いに注意して読む↓様子を想像して読む、といった段階を踏んだ音読がなされていて、楽しい授業の中にもしっかりと発展があったことに驚いた。授業の流れの中で気になったことが、歴史的仮名遣いの確認や間の取り方等、教師側が全て行っていたので、ある程度慣れてきたら生徒に聞き返してみても良かったのではないかと感じた。しかし、「をかしけれ」にポイントを絞って表現読みをさせた部分等は意表をつかれ、多くの場面で見本にしたいと思わされる授業であった。

(H・N)

多様な音読の工夫と発展的展開に良さを認めている。教師主導の授業に対しては、問題点を見いだすとともに、具体的に改善点を見いだしている。他の問題点については、「その中で気になった点は、やはり1時間のうちに『春はあけぼの』・『月のいと明きに』の2作品の音読を行う点である。(中略―渡辺) せっかく生徒は『春はあけぼの』の読みに慣れてきたところですので『月のいと明きに』に移っていくのはやはり多少強引なように感じた。1時間目は『春はあけぼの』に限定していればもう少し多様な読みを楽しめたのではないか。」(Y・S)、「この読みだけでは、情景をイメージすることは難しかった。春は明け方。夏は夜。秋は夕暮れ。冬は早朝。など、情景をかきたてる箇所はいくつかあるのだから少しの助言をし、イメージできたらいいなと思った。訳を自然に理解させるような工夫、情景を

自然にイメージできる工夫の両方が施せることができたなら最高の授業の流れができるのではないだろうか。」(T・Y)、「随筆は現代文でもこれまでも学習しているので、説明に時間を取らなくても分かると思う。歴史的仮名遣いも教師が言うのではなく、生徒に聞いてみても良かった。また、『春はどういうところが良いと書いてある?』『清少納言の言っていることに対してどう思う?』などの問いを入れたり、貴族社会で暮らしている清少納言の様子として教科書の図を見せたりするともっと良いのではないかと思う。」(S・Y)などとする意見が見られた。

学生は、模擬授業をおして、実践の工夫に学ぶとともに、授業に対する評価力を鋭くしている。これは、毎回提出を課しているレポートの模擬授業に関する感想・批評に多く見いだされる。

三 「国語科教育法演習Ⅱ」における学びの実際―学生の感想を中心に―

「国語科教育法演習Ⅱ」を終えた後に、学生に『国語科教育法演習Ⅱ』に学びて」の提出を求めた。この感想によって、以下に学生の学びの実際をとらえたい。なお、感想文末に記された担当者への謝辞は省略した。

(1) 批判的に見るということは、見るものの本質を見抜き、しっかりと捉えることができなければなりません。また、批判的に見ることにより、いろいろと深めていくことができると思います、国教法演習Ⅱでは他者の模擬授業へ、教材へ、批判的に見ていこうということが目標でした。一時間ごとに、必ずいくつか批判できるところを探し、それをどうすれば良くなるかということを考えてきました。毎回自分の授業を見る目の未熟さを感じ、先生や他者のするどい意見を聞いて見る視点を学びました。教材研究はとても奥深く、考えれば考えるほど、どれが一番いい方法かわからなくなってしまう。批判的に物事をみることができたとしても、最も良い改善策を考えるまでに至らないことも多々ありました。今後の課題はこの講義でみた他者の授業や、渡辺先生のミニ講義などで学んだことをふまえて、批判できるものに対しての改善策を考えていけるようにしたいです。また、佐渡山さんの講義で考えさせられた朗読についても、自分なりに工夫し、授業に生かして活きた

いです。そして、構造的板書のあり方、作り方、使い方も試行錯誤して自分の技術にしていけるようにしたいと思えます。この講義では学ぶことも多々ありましたが、それ以上に自分の課題を多くみつけることができました。

(I・A)

(2) 国語科教育法演習Ⅱでは、模擬授業の他にも、渡辺先生のミニ講義や朗読などもあり、学ぶことがたくさんありました。また、毎回のレポート作成で授業を見る目や、自分だったらどういう授業をするか常に考える姿勢ができました。

特に、板書の仕方や発問について学ぶことができたことが、一番良かったです。板書は、今、授業でどの部分をやっているか確認するときや、後で生徒が読み返したときにわかりやすいように、簡潔にそして、構造的に書くことが大切だと学び、これまでのように、ただ、発問を順番に書いていくような板書や、板書計画を一番最後に考えているようではいけないとわかりました。

みんなの模擬授業も板書については、特に注目して、私だったらどういう板書をするのか考えるようにしました。中には、構造的な板書を試みていた人もいて、その板書を見ると、その人が、この教材に対して、どういう読み取りをしているのかもわかってきました。また、発問の順番をきちんと考えていないと、授業の流れがおかしくなってくるのもわかりました。みんなの模擬授業を通して、板書計画に基づいて発問計画が作成されるという意味が、やっと理解できたと思います。板書の大切さはわかってきたが、まだまだ、いい板書を考えるのは難しく、これからは学んでいかなければならないことは多くあると思いました。この講義でたくさん課題を見つけることができました。

(S・Y)

(3) この半年間、様々な取り組みを通してたくさんのことを学びました。中でも授業後の先生の講評は、具体的で、授業の焦点化、立体化、発問の大切さ、構造的な板書、目標の具体化、生徒の実態把握、原文・表現に即した授業など、授業を行う上でのポイントや工夫、視点を学びました。

また、毎回のレポート作成や講義を通して、教材と授業を見る視点を養いました。この教材には、どんな特徴があつて、それをどう授業に活かすか。この授業を通して、生徒にどんな力をつけさせるかなど、たくさん教材と向き合い、じっくり考えることは、様々な発見につながりました。そして返却されたレポートには先生のコメントもついていて、それがとても励みになったと思います。

この半年間は、短い時間でしたが、とても濃密な時間が過ごせました。日々の積み重ねは、レポートやプリントという形で残りました。このやりとげた達成感が実習での自信につながると思います。まずは、ノート、プリントを見直し、少しでも実習で実践できるように頑張りたいです。

(S・A)

(4) 私は国語科教育法演習Ⅱを通じて実感したことは、他者の授業を批判的な視点から見られるようになったということです。今までは模擬授業を見て、「すごいなあ」と感心するだけでした。しかし、この講義に入ってから自分だったらこうする、こうした方がいいだろうな、ともし自分がこの教材だったら、どういう授業をするかといったように自分の身に置きかえて考えられるようになりました。それには、ミニレポートが関わってくると思います。ミニレポートをまとめることにより、簡潔ではあるのですが、大まかな指導目標、教材観をつかむ力がついたと思います。また、板書・発問・指示・などといった技術的な面においても大きな収穫があつたと思います。板書では、その日の授業の流れが一目でわかるような構造的な板書・発問や指示はあいまいにせずはつきりとする、といった様々な技術を習得できたと思います。

朗読では佐渡山美知子さんの講義を通して今までの私が考えていた朗読とは違う、相手のことを考えて読むということ学びました。この講義では上記のような実践的なことを学ぶことができました。しかし、現場に満足するのではなく、さらに上を目指し、生徒のための授業を展開していけるよう精進していきたいと思えます。

(M・S)

(5) 前期の国教法演習Ⅱは私にとってたくさん経験をjする場となつた。まずは朗読である。国教法Ⅰの時

とは違い、自分で教材を選び、それをどのように読んでいくか。本読みが苦手な私にとっては勉強になった。また、毎時間毎に行われる模擬授業後のレポートの提出はとても苦勞した。一つ一つの授業、一つの教材をしつりと見定め、自分なりの考えをまとめるというのは容易なことではなかった。しかし「自分ならこの教材をどう教えるか」という見方ができるようになり、教材を見る力は確実に身についたと思う。それに付け加え、皆の行う模擬授業は、自分とは異なる視点からの実践が多く、沢山のアイデアや考え方を得ることができた。このような経験を踏まえ、6月には教育実習にも行った。実習では、まさに「百聞は一見に如かず」であった。くやしい思い、つらい経験、自分の小ささなど沢山の感情が芽生え、大学では得ることのなかった経験をする事ができた。皆にもたくさん経験をしてきてほしい。私達がやってきた事はけつしてムダではなかったと私は感じた。教師になってもそれは変わらないと思う。やらなければ結局は何もできない。教師になってもそれは変わらないと思う。やらなければ結局は何もできない。常に向上心のある人間でありたい。

(Y・Y)

(6) 私は国教法演習Ⅱで、本当にたくさん事を学びました。中でも一番大きかったのが、渡辺先生のミニ講義です。実践重視の国教法、国教法演習の中で、あらためて国語の理論や学問的な部分に触れられるのは、非常にためになりました。また、「国語教育の学び方」についても学ぶことができました。

毎回の課題であった前回の模擬授業の感想も、回を重ねるごとに要領を覚え、文章を組み立てる瞬発力が身についた気がします。こういう力は、日常的に行わないと養われないものなので、とても実になったと思います。

国教法演習Ⅱで私はたくさん資料と経験、それに先生や教職を履修している仲間からのアドバイスを手に入れました。少しではありますが、確実に成長できた気がします。

ここで学んだ事を最大限に生かし、有意義な教育実習の実現に努めます。

(M・W)

(7) この教材を通して私は何を教えたいのか？何を教えないといけないのか？私は教材観を書く時、いつもこの課題で行き詰まっていました。分かっているようで言葉に出来なかったり、必死で言葉にしても、こん

な薄っぺらいものじゃない気がしたり、本当に教えるべき大切なことが分かっていなくて、いつも混乱しました。毎回のレポートやみんなの模擬授業を受けて、それが分かるようになったわけではありませんが、本当につきたい国語の力・伝えないといけない文化・気付かせないといけないもの、それらのヒントを見つけることができませんでした。このヒントが消え失せない前に、何かを手につかむことができたらいと思っています。また、毎回行われた渡辺先生の講義も、たくさんの事を教えてくれました。構造的な板書や、着語の効果など技術面はもちろんですが、何よりも国語教育の根本的な部分を勉強しました。つかめそうでつかめなかつた答えや、これだと言いつけるには勇気がなく言いまわしでごまかしていた答えを渡辺先生は、きちんと言葉にし、資料にし、説明してくれました。15分という時間は短か過ぎました。

(G・M)

(1)の学生は、批判的に見ることをとおして、授業の改善を求めている。(2)は、自らを授業の場に立たせようとすることで学びを深めようとした。(3)は、講義、講評、レポート作成に取り組むことを通して、濃密な学びの時間を過ごしたと言う。(4)の学生は、ミニレポートへの取り組み、わが身に置きかえた積極的な学びによって大きな収穫を得たと述べる。(5)は、朗読、レポート、模擬授業を通して、学びを確かにしている。(6)では、講義、レポート、模擬授業を通して、確実に成長できた気がすると記している。(7)は、講義、レポート、模擬授業を通して、国語教育の根本的な部分を学び、本当につきたい国語の力を見いだしたと振り返る。これらの学生は、特別ではなく、多くの学生が同様のことを述べている。

学生は、課題意識をもって「国語科教育法演習Ⅱ」に積極的に参加し、朗読、一五分講義、模擬授業1・2、および毎回提出のレポートのそれぞれを通して、教材を見る目を養い、育成すべき国語の力を考え、授業展開のための指示、発問、板書の技術を学び、批判的な視点から課題を見いだすとともに、その改善策を考える。さらに、「国語教育の学び方」、「国語教育の根本的な部分」についても学びを進めている。このような学びを通して、学生は、国語力

を高めるとともに、教材把握力、授業構想力、授業展開力、評価力を身に付けていくと考える。

おわりに

以上、「国語科教育法演習Ⅱ」の実際を、①一五分講義、②朗読、③模擬授業に分けて紹介し、若干の考察を加えるとともに、④演習に対する学生の感想をとおして、学びの実態をとらえようとした。

①一五分講義は、短いながら、毎回提出を課している教材と模擬授業に関するレポート、朗読とその講評、模擬授業とその協議・講評のそれぞれに結び、実践上の技術、また、その基盤ともなる理論を講義することによって、学生の国語力、授業力を高めるものとして機能している。

②朗読における教材の発掘・教材化は、授業力（広義）の一つである、広く教材を求め、教材の価値を見いだす教材開発力・教材把握力の育成にも繋がっている。朗読の講評は、ア.発音・発声、イ.声の大きさ・声の通り・勢い、ウ.音調、エ.声の質、オ.間、カ.緩急・強弱、キ.意味表現・プロミネンス、他に、初め（出だし）と終わりの読み方や句読点の読み方、読み間違い、さらには、ク.リズム・テンポ等及び、学生ので朗読する技量を高めるものとなっている。

③模擬授業において、学生は、指導案を作成し、実践する。実践的な技能を試みることをとおして実践的な認識を深め、課題を見いだすことによって学びを深める。また、学生は、模擬授業を観察し、直後の相互批評と講評、毎回提出のレポートによって優れた点を評価し、自らのものとするとともに、課題を見いだし、その改善を考える。このような営みの蓄積によって、学生は、国語力とともに授業実践力を高めていくものと考ええる。

④学生の感想によれば、学生は課題意識をもって、朗読、一五分講義、模擬授業1・2、および毎回提出のレポートのそれぞれに積極的に参加することで、教材を見る目を養い、育成すべき国語の力を考え、授業展開のための指示、発問、板書の技術を学び、批判的な視点から課題を見いだすとともに、その改善策を考える。さらに、「国語教育の学び方」、「国語教育の根本的な部分」についても学びを進めている。このような学びを通して、学生は、国語力を高

めるとともに、理論と授業実践力（教材把握力、授業構想力、授業展開力、評価力）を身に付けていることがうかがえる。

学生は、「国語科教育法演習Ⅱ」を終えて、九月に教育実習を行う。教育実習は三週間にわたって行われ、担当時間の一時間を研究授業にあてることになっている。研究授業を含む授業実践は、実践報告にまとめ提出する。教育実習は、国語科教育法の集大成であるとともに、新たな授業実践の一步である。その実践を記録しまとめることをとおして、実践・研究力に培うことが期待されている。

注1 渡辺春美「国語科教員養成に関する一考察（一）」『国語科教育法Ⅰ』を中心に――（『沖縄国際大学日本語日本文学研究会研究』第九卷二号 二〇〇五年三月 沖縄国際大学日本語日本文学会刊）に「国語科教育法Ⅰ」の内容については詳述した。

注2 渡辺春美「国語科教員養成に関する一考察（二）」『国語科教育法Ⅰ』を中心に――（注1に同じ 五四―五八頁）において朗読指導の実際を詳述した。「国語科教育法演習Ⅱ」における朗読も、自ら教材開発を行う点を除けば、同様の指導を行った。